

嫁姑関係位置認知について両者の差異 —福岡市と大分市の場合—

根笈 美代子

(大分大学教育学部)

平成4年1月30日受理

Differences in Perceptions of the Relationship between Daughters-in-Law and Mothers-in-Law —In the Case of Fukuoka City and Oita City—

Miyoko NEOI

Faculty of Education, Oita University, Oita 870-11

The purpose of this study is to clarify perceptions of the relationship between daughters-in-law and mothers-in-law, attitudes toward coresidence, their positions and the desirable relationship. The self administered type of survey was conducted to 428 married women in Fukuoka city and Oita city in April to May, 1990. The major findings are as follows:

1) 82% of the sample regarded them as, either daughters-in-law or mothers-in-law, the former felt their position as unhappy, while the latter felt as happy. The older they are, the less they had such feelings.

2) About half had positive attitudes forward coresidence with their parents and their eldest son in the future, and over 30% wanted separate living from their children.

3) 70% of daughters-in-law wanted to change their relationship, while among mothers-in-law the proportions of those who wanted to change and of those who did not were almost the same.

4) The result of analysis of free-answers shows the discrepancies between their attitude, but the mothers-in-law seems to approach to the daughters-in-law.

(Received January 30, 1992)

Keywords: perception 認知, eldest son 長男, position 立場, the relationship between daughters-in-law and mothers-in-law 嫁姑関係, coresidence 同居, generation 世代.

1. 緒 言

今日、統計的に人口の高齢化の進行は著しく、この現象は、個人的には長寿化、そして、一生における高齢期の生活の伸長を意味しており、今後、人類史上、未経験時代の到来が予測されている。このような時代に「人としてどう生きるか」は、個人、家族、そして、社会のいづれにとっても重要な探索課題である。なかでも、平均寿命は女性の方が長く、百歳以上の長寿者層の大半は女性であるという事実もあり、また、高齢期の介護者として、妻、嫁、娘など女性への期待が、男女ともに高いことも報じられている¹⁾。日本の伝統的規範や性別役割分

担意識などとも合わせて考えると、女性により大きな課題を提供していると言える。これらの課題解決のためには、個人、家族、社会、それぞれの対応が必要である。仮に、「個人としての対応」に限って考えてみても、多様な対応が必要であろう。法制度の「家」は既に消えたとしても、現実生活では多くの名残りをとどめ、それらが、一人の人間としての女性の心情や行動に強い規制を加え、家族の人間関係においても悩みとして存続しているという状況は、九州でも決して例外とは言えず、先行の諸調査や社会教育実践面で数多く見聞されている。これらを踏まえて、今回、筆者は、女性の人生に今なお重

要な影を落としながら、「女性同志の永遠の課題」というように非科学的な表現で見過ごされている嫁と姑の関係について、人口の高齢化が進み、長寿の時代として今後女性としてどう生きるかを、女性自身が考えるための資料を得るために、調査、研究を試みることにした。

嫁と姑の研究については、これまで多くの研究がなされているが、それらは両者間の心理的葛藤の分析とその解決に焦点がおかれているものが多い。例えば、牛島義友(1955)は、嫁姑に代表される人間関係の問題について、450組の嫁姑を調査し²⁾、仲の良いグループと仲の悪いグループとを統計的に比較し、それぞれの性格の重要性をとり挙げている。その他、津留(1953)、我妻(1955)などによる研究もその大部分は、「嫁と姑の関係を頂点とする三世代家族の親子間の葛藤を防ぐ最も効果的方法は、別居ないし、生活の分離である」³⁾、「娘夫婦との同居、または、隣居するという修正直系家族の生活シナリオが期待される」⁴⁾という方向で解決を求める。あるいは葛藤の内容についても「世代間の価値意識のズレ」⁵⁾によるものとしてとらえる傾向が強い。最近の研究例として、まず、「生活の分離」という視点からは菅谷論文(1982)がある。生活の分離がより進んでいる近郊農村を対象にして、①住宅、②職業、③家計、④接触時間、⑤家事、⑥余暇活動、⑦社会関係の7領域をとり、世代間の分離・不分離がどのように現れているかを分析している⁶⁾。また、長谷川論文(1984)では、二世帯専用住宅での息子夫婦同居と娘夫婦同居との比較によって嫁姑関係を見ているが、前者で生活のほぼ全てが分離するなかで、嫁姑関係もうまくいっており、現状同居への満足感が高く、後者では、母・娘の全員が「一つの家族として暮らしている」という回答をしている点からも、非常に、家族全体の接触度、統合感が強いと考察されている⁷⁾。また、「世代間の価値意識のズレ」については、佐野論文(1988)がある。「嫁と姑、それぞれが、相手の考え方や好みの点で一致していると考えているか、それとも不一致であると考えているか」について分析している⁸⁾。すなわち、以前は、家族の人間関係として嫁と姑の関係およびその限りにおける分析と対策を提示するという研究方向が強かったのに対して、女同志ならぬ、より広い関係として世代間の価値意識のズレという観点より分析が向けられてきている。前述したように、前人未踏の高齢化社会に向けて「女性が、一人の人間としてどう生きればよいか」の探索資料となる回答としては、今後、更にこの「世代間の価値意識のズレ」を乗り越えた、時代共通の価値意識の創出が重要問題と言える。

そこで、本研究の目的の一つは、まず、既婚女性が日常的にどの程度自ら嫁として、あるいは姑として、嫁姑の関係を意識しているかについて知ることであり、年代や居住形態による意識のギャップばかりでなく、それらの意識の質的なものを探ることである。二つめは、同居に関わる考え方について、長男規範がまだどの程度存在するかを探るばかりでなく、今後の親の扶養の行方を探ることである。そして三つめについては、今後の嫁姑関係をどのように位置づけるかについての考え方を知ることになり、最後には、自由記述の表現中に今後の嫁と姑のあり方、ひいては女性の生き方について、本質的な課題解決の途を探ることにある。

以上の研究目的のもとに、今回、北部九州市部における嫁姑関係の実態把握とその考察を行い、今後の詳細な研究への出発点とすることとした。

2. 研究方法(調査方法、調査時期、調査対象)

平成2年4月～5月、既婚女性600名(福岡市300、大分市300)に質問紙を配布、留め置き、自記式回答による調査を試みた。対象者の選考は、①既婚女性であること、②一応選定した居住地域の居住者であること、③年代的には、特定年代に集中されることのないように、可能な限り広く分布されること、などを考慮し福岡市から5地区と大分市から7地区を抽出した(表1)。調査票は各地区の婦人会や公民館に集う趣味の会、あるいは生協の役員会などを通じ配布した。質問紙はフェイスシート、及び自由記述回答を含め11問を設定した。内容としては、現在嫁姑のいずれの立場にあるか、続柄、同居・別居状況を加えての類別(表2)、嫁姑関係の日常意識、嫁姑関係の受けとめ方とその具体的内容、嫁姑関係の今後の家族関係上の位置づけなどについてである。有効回収数は428(福岡市219、大分市209)である。また、既婚女性の現在の家族内立場が「嫁であるか姑であるかの判断は、外部からの認定は方法上困難なので、回答者自身の判断、つまり自己認知によった。以下、それらの属性について述べると、まず、「嫁である」と答えた人(以下、「嫁である」層と記することにし、その他も同様とする)は、最も多く255名(59.6%)で、「姑である」層は77名(18.0%)、「嫁であり姑である」層は18名(4.2%)である。また、「いずれの立場でもない」層は75名(17.5%)いるが、その内訳は、①子供は未だ未婚である(37名・8.7%)、②子は娘のみで息子を持たない(18名・4.2%)、③家族と死別している(18名・4.2%)、④子供を一人も持たない(2名・

嫁姑関係位置認知について両者の差異

表 1. 地区別にみる居住形態（有効数：428名）

(地区)	大分市 人 (%)				(区)	福岡市 人 (%)			
	同居	別居	その他	計		同居	別居	その他	計
敷戸	7(9.5)	54(73.0)	13(17.6)	74(100)	東	3(60.0)	1(20.0)	1(20.0)	5(100)
戸次*	20(40.8)	18(36.7)	11(22.4)	49(100)	博多	23(40.4)	27(47.4)	7(12.3)	57(100)
吉野*	17(58.6)	7(24.1)	5(17.2)	29(100)	中央	30(29.7)	48(47.5)	23(22.8)	101(100)
竹中*	23(65.7)	7(20.0)	5(14.3)	35(100)	南	8(24.2)	18(54.5)	7(21.2)	33(100)
その他	6(27.3)	14(63.6)	2(9.0)	22(100)	城南	0(0.0)	4(80.0)	1(20.0)	5(100)
計	73(34.9)	100(47.8)	36(17.2)	209(100)	早良	8(47.1)	6(35.3)	3(17.6)	17(100)
					西	0(0.0)	1(100)	0(0.0)	1(100)
					計	72(32.8)	105(47.9)	42(19.2)	219(100)

* 農村地区で同居率が高い。

表 2. 認知立場と同・別居および続柄関係（実数・%）

認知立場	同居		別居		計
	長男	長男以外	長男	長男以外	
嫁	94(36.9)	19(7.5)	84(32.9)	58(22.7)	255(100.0)
姑	20(26.0)	5(6.5)	52(67.5)		77(100.0)
嫁・姑	8(44.4)		10(55.6)		18(100.0)
計	146(41.7)		204(58.3)		350(100.0)

0.5%)である。立場の年代との関係では「嫁である」層は20代から50代に、「姑である」層は、50代から70代に分かれて分布している。「嫁であり姑である」層は、50代以上への年代傾斜がみられ、嫁の立場も合わせ持つ立場として注目される。自己認知による立場別同居及び続柄関係では、いずれの立場の場合も、別居が同居を上回り、全体として、同居が41.1%、別居が58.3%である。また、別居の場合より同居の場合のほうが、長男の嫁である傾向が強い。

3. 調査結果

結果的に、地域差は数量的に見だし難かったので、ここでは、全体総数の状況分析を主に述べる。なお、図1～図9においては、全て、有意差有り($p \leq 0.1$)と認められたもののみである。

(1) 日常嫁姑関係を意識する程度

まず、嫁と姑の関係を、特定の場や状況下ではなく、毎日の日常的な現実において、どのように意識しているかについてとらえてみると、「あなたは毎日の生活の中で、嫁と姑という関係を意識することがありますか」という問いに対して、大きくは、「意識する」が51.9%、

「意識しない」が46.7%で、前者が半数を越えている。更に、「意識する」程度をみると、「ときに意識する(33.9%)」が、「よく意識する(18.0%)」を大きく上回り、「意識しない」程度は、「全く意識しない(12.1%)」というよりは「あまり意識しない(34.6%)」状況ということである。嫁、姑それぞれの立場別にみれば(図1)、「嫁である」層は「意識する(61.8%)」、「意識しない(38.2%)」で前者が高く、「姑である」層は「意識する(35.1%)」、「意識しない(65.0%)」で後者が高く、

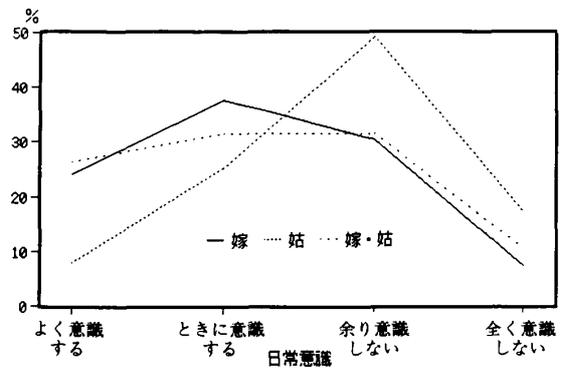


図 1. 日常嫁姑関係を意識する程度（認知立場別）

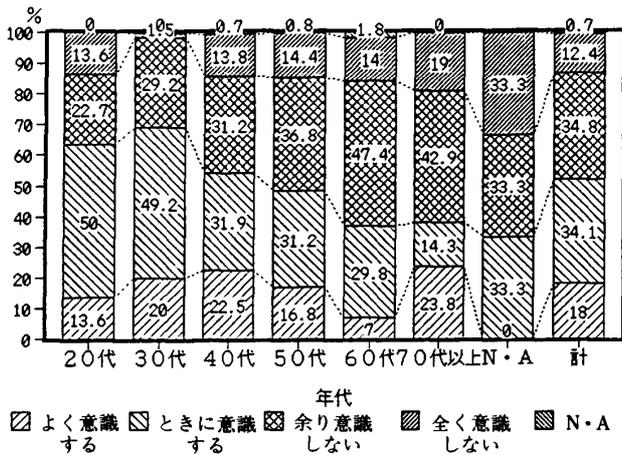


図 2. 日常嫁姑関係を意識する程度 (年代別)

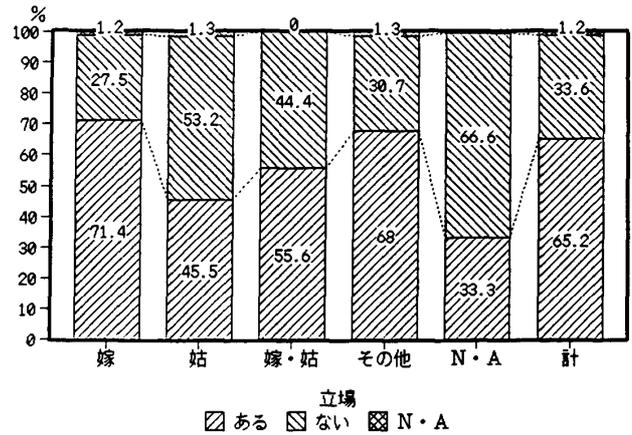


図 3. 日常嫁姑関係で「いやだ」と思ったことの有無 (認知立場別)

数値的には、相反する割合になっている。また、「嫁であり姑である」層では、年代的には「姑である」層色をもつが、日常的な意識の状況では、「嫁である」層の様相と似た実態を示し、興味深い状況をみせている。続柄別にみると、「長男を媒介とする関係」層、つまり、「長男と同居する姑及び長男の嫁」の方が、「長男以外を媒介とする関係」層、つまり、「長男以外の息子と同居の姑及び長男以外の嫁」より「意識する」割合が高い。年代別では(図2)、20代から40代までは「意識する」が「意識しない」を上回り、50代以上では逆の傾向を示し、年齢が高くなるほど、「意識する」度合いが薄れることを示している。その原因については、年経過による「馴れ」であるのか、それとも「あきらめ」の気持ちが変わってのものか、あるいはまた、現時点における50代以上が持つ嫁姑関係の存在を当然のことと考える「共通的な時代感覚」なのか、(もしそうであれば、現在の若年齢層が高齢になる時期には異なったものになるなどが考えられる)などを含めて、今後の探求課題に残したい。

次に、現在の同居・別居別にその意識状況をみると、「同居」層では、「意識する(67.8%)」が「意識しない(31.5%)」を大きく上回り、「別居」層では「意識しない(53.4%)」と「意識する(46.6%)」とは、前者が後者をやや上回るが、数値としてはほぼ折半に近い状況がある。これは、同居か別居かによる日常感覚としての、「接する」ことの頻度が意識の度合いを決定するとまでは言えないまでも、実際的な住まいの物理的距離の近さが互いに何らかの形でプレッシャーとなっていることが推測できる。次に、この「意識する」場合の情緒的な面を「いやだ」と「よかった」という2つの情緒的な受けとめ方でとらえ、更に、それはどのような具体的生活体

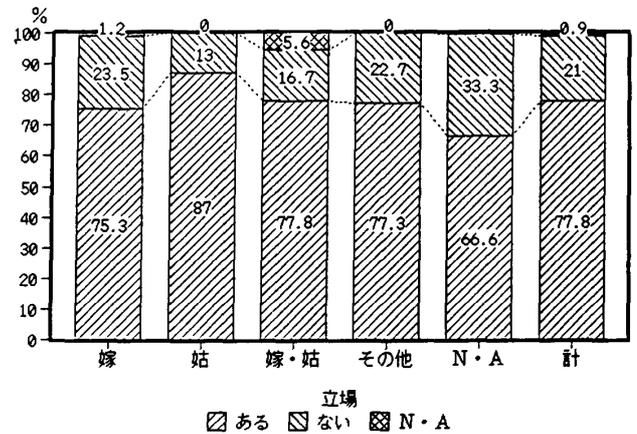


図 4. 日常嫁姑関係で「よかった」と思ったことの有無 (認知立場別)

験の中で生じてきたかを分析すると以下の通りである。まず、「嫁と姑の人間関係で、いやだと思ったことがありますか」(図3)及び「嫁と姑の人間関係でよかったと思ったことがありますか」(図4)という2つの問いの結果を照合してとらえると、「いやだ」という回答は「嫁である」層に高く、また、「いやだと思ったことがある」と答えた層は、日常的に「意識する」割合が高く、「意識する(68.6%)」と「意識しない(31.2%)」で、「いやだと思った経験がない」層では、逆に、日常的に「意識しない」場合が高い(「する(21.6%)、しない(78.5%)」(図5)、つまり、「意識する」という実態は、どちらかという「いやだと思うこと」と関連していることを物語っている。次に、これらの感情が生じる具体的な生活体験の場としては、「いやだと思ったことがある嫁」層では、「自分の気持ちがなんとなく縛られているような気がする(28.0%)」、「生活のあらゆる面で考え方が違う(26.9%)」など、「いやだと思った姑」層で

嫁姑関係位置認知について両者の差異

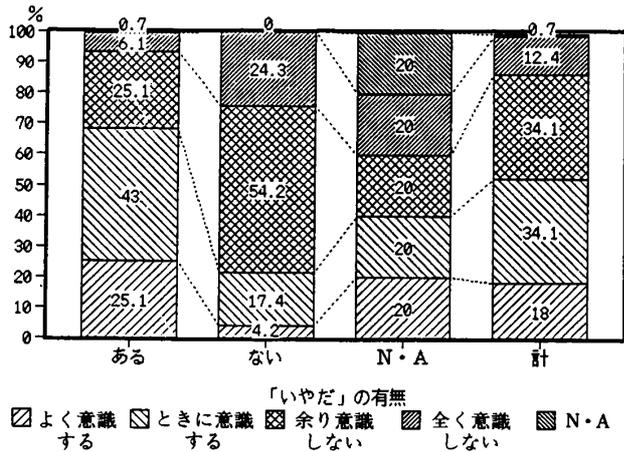


図 5. 日常嫁姑関係で「いやだ」と思ったことの有無と意識する程度

は、「生活のあらゆる面で考え方が違う (22.9%)」、「料理・献立・嗜好が合わない (22.9%)」、「外出、買い物などで気兼ねをする (20.0%)」などが上位に挙がっている。更に、「よかったと思ったことがある嫁」層では、「生活のあらゆる面で身近に相談相手があり助かる (30.7%)」や「別に努力しなくても明るい人間関係 (32.8%)」あるいは「夫または息子を含め一つの家族としてにぎやか (23.9%)」などが上位に挙げられている。以上の結果より、嫁と姑の満足、あるいは不満足の原因については、情緒的要因と手段的要因の2つに分類できるが、「嫁である層」の不満足は、「気持ちが悪く縛られて」あるいは「考え方が違う」などの情緒的要因に、満足は、「身近に相談相手があり助かる」あるいは「家事の分担などで自由時間がもてる」など手段的要因の割合が高い。また、逆に、「姑である」層の不満足では「料理・献立・嗜好が合わない」「子供のしつけで意見が合わない」などの手段的要因が、満足は、「普通の人間関係」「一つの家族としてにぎやか」などの情緒的要因に集中する傾向がみられた。これについては、三世代同居についての「妻の満足、不満足」にみる調査結果(野村・1976)として示されている状況と一致するものがみられる⁹⁾。

(2) 「同居志向」について

老親に対する扶養には、金銭の給付を中心とした経済的扶養だけでなく、身の回りの世話や病気の際の看護を中心とした身体的介護、及び孤独感や寂寥感をなくさせるための精神的援助が含まれる¹⁰⁾。同居は確かに、老親扶養にとって効果的な方法である。しかし、湯沢は、昭和30年代までの日本の親の大部分が経済的な自活能力を欠いていたため、老後、子供家族と同居して扶養されるほか生きる方法がなかったが、年金制度や退職金が充

実してきたため、お金のための同居ではなく、心の触れ合いやさみしさを救うための同居に目的が変わってきていること、つまり、同居と扶養は別問題であると指摘している¹¹⁾。総理府の調査結果¹²⁾でも、「望ましい家族形態」として、「親子、お年寄りなど大勢で暮らすのが望ましい」と思っている人が60%もいるとされている(1988)ことと表裏関係にあるかと考えられる。また、野村などは情緒的同居欲求は、通常、親の側に多いものであり、その場合、子夫婦の側では同居への動機づけを支えているのは「家」制度的規範意識であるとし、例えば、「親に孝養をつくすべきである」とか「親の面倒をみるのがあたりまえ」とかいう慣習的な規範意識から、「親と共に暮らして面倒をみてやりたい」という内発的欲求へと変化していくとき、それは慣習的結合から情緒的結合への変化と言えるなど同居意識の質的な変容を示し、「長男同居」意識についても、かなり、弱まっているとみている。今回の調査で、「同居」に関わる考え方状況として、具体的には、①長男との同居に関する意識の実態について、②同居か別居かという意識のみでなく「親が老年になっても別居のままで過ごすけれども、親の生活が望ましく行われるような手だてはこうじる」といういわば第三の考え方を設けて問うてみた。結果として、①については、全体的には、「長男は…」と「長男であっても…」の回答合計と、「長男、二、三男に関わらず…」の回答数を比較すると、ほぼ同じ割合であった。②の場合は、「同居志向」には「最初は親と別居し、親が老年になったら同居する」という「中途同居志向」が17.8%含まれている。これを「同居志向」に入れるか、「別居志向」に入れるかによって結果もまた変わってくる。もともと、「中途同居」という考え方はほぼ戦後のもので、結婚を境にして嫁が全く異質である夫の家族と交わるに当たって、双方の緊張感を和らげる一つの方法であると思われる。そこで最初別居しながら徐々に互いに交流を深め、親密な間柄になってから最終的には親との同居に落ち着くという形態である。従って一応、「同居志向」としてとらえ統柄別に同居・別居志向をみると、「長男を媒介とする」層では、「同居志向」が60%、「別居志向」が40.0%と3:2の割合で長男の「同居志向」が高く、また、「長男以外を媒介とする」層では、「同居志向」が42.9%、「別居志向」が57.1%と前者とは逆に「別居志向」が多くなっている。「別居志向」の内容としては「親が老年になっても別居のままで親の生活が望ましく行われるような手だてをこうじるほうがよい」とする人が、単に「結婚後は親と別居するほうがよい」

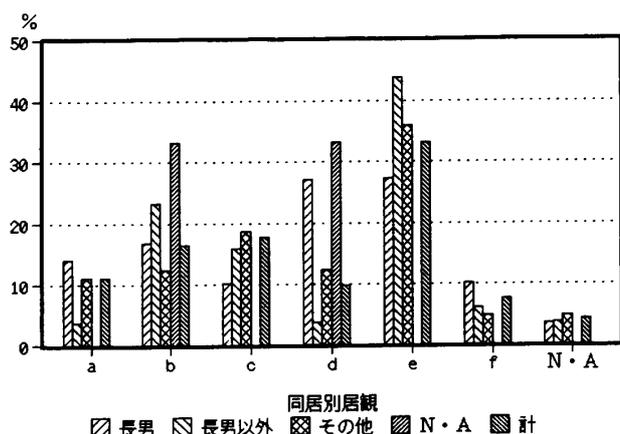


図 6. 続柄別にみる同居別居観

a: 結婚後も、長男は親と同居する方がよい。b: 長男、二男、三男に関わらず、結婚後は親と同居する方がよい。c: 長男であっても、最初は親と別居し、親が老年になったら同居する方がよい。d: 長男、二男、三男に関わらず、息子のうちだれか一人は親と同居する方がよい。e: 結婚すれば親と別居し、親が老年になっても別居のまま親の生活が望ましく行われるような手だてをこうじる方がよい。f: その他。

とする人より多く、特に「長男以外を媒介とする」層にこの傾向が強かった。なお、この同居・別居志向を現在「同居」層と「別居」層別にみると大差がみられ、「現在同居」層は「今後も同居」志向に傾いている状況がみられた(図6)。

(3) 今後における嫁姑関係の位置づけとしての考え方

今後の嫁姑関係をどのように位置づけるかについての考え方を、①嫁姑関係の維持・重視型：日本の家族を支えている大事な人間関係として大切に、②関係温存型：いろいろ問題ありとしても、日本の家族として残さざるを得ない、③関係改変型：一日も早く整理して結婚した息子の妻、母という考え方に改めるべき、の3つの型に分けて、「維持・重視型」と「温存型」はいずれも、今後に向けて嫁姑関係維持志向と言えるので、その合計と「改変型」との割合をみると、「嫁」層では、前者が37.2%、後者が62.3%との大差で後者の支持があり、「姑」層では、ほぼ同じ割合であった。この結果について、今回数値的に有意差は認められなかったが興味ある問題として、今後の探求としたい。年代別に比較すると、いずれの年代にあっても「改変型」志向が半数を越えている(図7)。特に、「嫁である」層である20代は、ほぼ70%が「改変型」を示している。「維持・重視型」は年代が高くなるほど、わずかながら割合の増大する状況を見せている。

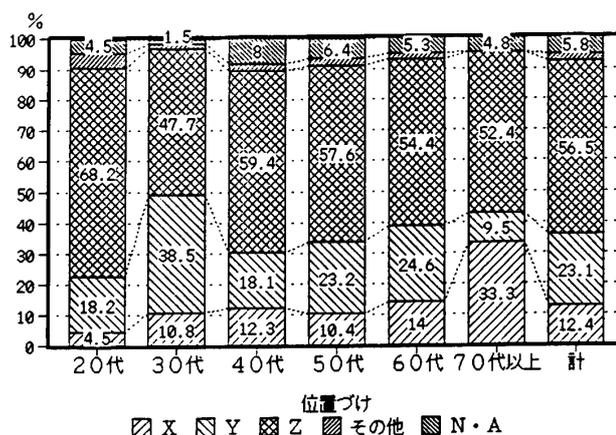


図 7. 嫁姑関係の位置づけに関する考え方(年代別)

X: 日本の家族を支えている大事な基本的人間関係なので嫁姑という立場を残して大切に維持していくべきである。Y: いろいろと問題があるとしても日本の家族としては必要な人間なので嫁姑という立場は残さざるを得ないと思う。Z: 昔の「家」の名残としての人間関係なので嫁姑という考え方は一日も早く整理して結婚した息子の妻という関係に立った考え方や生活のあり方を考えていくべきである。

(4) 今後の嫁姑のあり方についての考え

最後に、今後の「嫁と姑の人間関係について、あなたの考え方を書き下さい」という質問に対する回答(自由記述)についての解析を加える。回答者は428人中188人で、質問紙調査における自由記述回答としてかなり高い44%という回答率を示し、また、その記述においても記述枠をはみ出すほどの状況があり、回答者の関心の高さが察知された。回答内容の全体傾向としては嫁姑関係そのものについての記述(144名・67.9%)と同居別居についての記述(62名・24.8%)に大別できる。つまり、嫁姑関係という点、30%弱の人が、即ち、同居か別居かという問題に糸口を見いだそうとする傾向が見られた。なかでもほんの1,2例ではあるが、姑で「何も息子夫婦と暮らす必要がないので娘と同居してもよい」あるいは、「したい」との表現をしている事例は、前後の記述より、息子夫婦とはどちらかと言えば別居を希望していると読み取れ、一応、「別居志向」に、また、嫁の「話の通じる姑なら同居してもよい」や「長男の嫁だから同居せざるを得ない」などの表現などは、条件つきで、しかも消極的ではあるが、一応「同居志向」に入れて統計上の処理をした。次に、嫁姑関係(67.9%)として記述回答者について分析すると以下の通りである。まず、回答の内容を大まかに整理すると、A:意志の疎通重視型、B:協力・援助重視型、C:立場尊重型、

嫁姑関係位置認知について両者の差異

表 3. カテゴリー別具体例

A 意志の疎通重視型
<ul style="list-style-type: none"> • お互いの意見を言い合い開き合えばこじれることなく • 譲り合いの心, お互いに • お互いに信頼しあい, 会話を多く持って明るく生活できれば • お互い暖かい心を出し合って, 円みのある生き方を • お互い愛情を持って接するよう努力したい
B 協力・援助重視型
<ul style="list-style-type: none"> • お互い協力, 理解 • 家族としてお互い助け合っていきたい • 手助けが必要なとき助け合えるような関係 • 仲良く助け合い楽しい家族関係を • 手助けを必要とすればできるだけ助け合い感謝し合う心で
C 立場尊重型
<ul style="list-style-type: none"> • 一人の女と女という立場で接するように • 良い人生の先輩である • 嫁というより夫の妻と考えたい • 友情に似た尊敬の念を互いに • 互いに相手の立場に立って考え行動し, 独断の判断をしない
D プライバシー尊重型
<ul style="list-style-type: none"> • 干渉しない, 個人の自由を守りたい • お互い干渉しない, 自分のしたいことを見つけて • 姑が生活している間, 気の休まる時はなく自分の時間がなかなか持てない • 二世帯住宅でつかず離れず • 一定の距離をおいてお互い自立した生活を
E 気持の切り替え重視型
<ul style="list-style-type: none"> • 気持ちを切り替えれば良い方向に • 実の親子というわけにはいかない, 他人同志と割り切って付き合っ • 嫁姑という言葉は好きではない • 自分の母親と思えば生活した方が • 肩のこらない関係
F あきらめ型
<ul style="list-style-type: none"> • 大変難しい, 親子みたいなわけにはいかない • 義理があって人間社会, 言葉に言い表わすことのできない関係 • 嫁姑の関係はこれからも続く • 難しい, もっと気楽にものが言えたら • 生きた時代が違う, 考え方が違うし合わない点が多い

D: プライバシー尊重型, E: 気持ちの切り替え重視型, F: あきらめ型, という6つのカテゴリーに整理された。回答の具体例の一部についてカテゴリー別に表3に示した。全体として、「E: 気持ちの切り替え重視型」が約40%と最も多く、次いで「C: 立場尊重型」が約20%強、そして、「A: 意志の疎通重視型」が14%である。「E: 気持ちの切り替え重視型」の内訳は、「他人と割り切っ」て、「無理をしない, 肩の凝らない関係」, 「余りこだわらない, 意識しないで」などと, クールな方向よりはむしろ「母・娘のように」, 「友達のように嫁と仲良く」など, 従来から言われている情緒的な色彩の濃い域をでていない。特に, 70代の「姑である」層は, 「嫁と仲良くしたい」, 「嫁には老後をみてもらうので, なるべく円満にいくように」などが100%占め, 残り少ない人生を平穏無事に送りたいという立場の転換期といえる50代を軸にして, 「以下」と「以上」の2つの世代に分けて比較すると(図8), 前者では, 割合の高い順に「気持ちの切り替え重視型」(32.4%), 「立場尊重型」(23.0%), 「意志の疎通重視型」(18.9%)となり, 後者は「気持ちの切り替え重視型」(45.9%), 「立場尊重型」(20.3%), 「あきらめ型」(16.2%)を挙げている。

つまり, 両者ともに「立場尊重型」と「気持ちの切り替え重視型」の比重が高いが, 現在, 嫁か姑かの立場を加えて考察すると(図9), 「嫁である」層は, 経験の薄い部分を姑との「意志の疎通をはかる」ことで方策を見つけようとし, 「姑である」層は, 「あきらめ」から出発しようという傾向が窺える。同居・別居志向のいかに関わらず, 嫁姑双方の自由記述にみられる表現方法とし

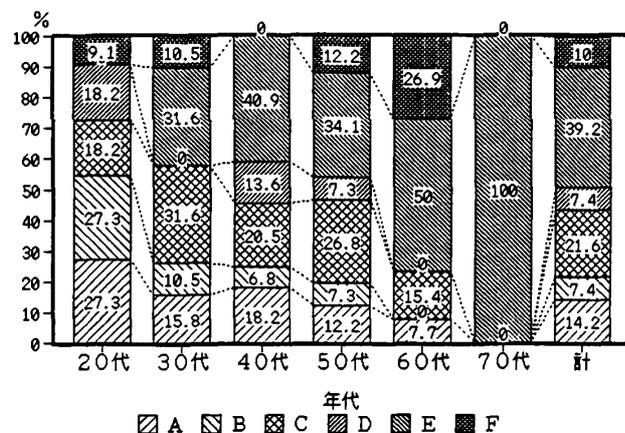


図 8. 今後の嫁姑のあり方に関する考え方(年代別)

A: 意志の疎通重視型, B: 協力・援助重視型, C: 立場尊重型, D: プライバシー尊重型, E: 気持ちの切り替え重視型, F: あきらめ型。

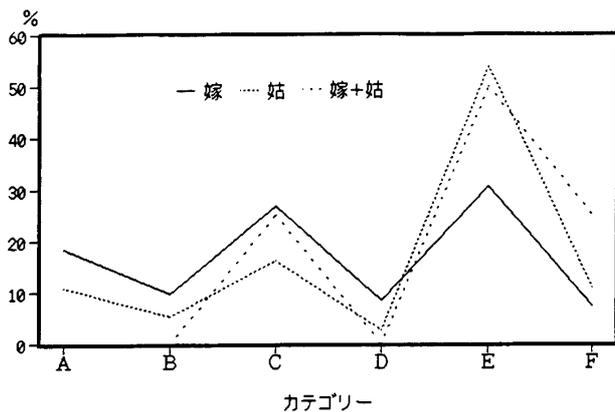


図 9. 今後の嫁姑のあり方に関する考え方(認知立場別)
 A: 意志の疎通重視型, B: 協力・援助重視型, C: 立場尊重型, D: プライバシー尊重型, E: 気持ちの切り替え重視型, F: あきらめ型。

て、「自立」、「尊重」、「努力」、「理解」、「個人」、「自由」、「援助」などの言葉が数多く認められたが、これらがわれわれが求めている、今後の女性の生き方を探求する上での嫁姑関係の本質的課題の解決にむけて重要なポイントになるかどうかについては、更に検討の余地がある。

4. 結論と考察

以上の分析結果から得られた知見をまとめると、次のようになる。

① 対象者の約 82% が、現在、嫁か姑かの立場にあることを自分で認めており、日常生活の中で嫁姑を「意識している」状況は、現実問題としてかなりの割合であることが認められる。「嫁である」層が「姑である」層より強く意識しており、それは、「いやだ」という感情に結びつく傾向が強く、「姑である」層では、「よかった」というそれと結びつく傾向が強い。また、年齢が高くなるほど「意識する」度合いが薄れるという結果については、自由記述による嫁姑関係のあり方についての表現を加えて考えると、「嫁である」層は、経験の薄い部分を姑との「意志の疎通をはかる」ことで方策を見つけようとし、「姑である」層は、「あきらめ」から出発しようとする方向が窺える。また、嫁姑関係で満足、不満足の原因については、「嫁である」層の不満足は情緒的要因に集中し満足は手段的要因の割合が高い。そして、「姑である」層の不満足は手段的要因に高く、満足は情緒的要因に集中する傾向がみられる。

② 親との同居志向も、長男との同居志向もともに半数程度であるが、特に、長男の同居志向は長男以外のそれより強いことがわかった。また、「中途同居」志向が約

20% 程度いることも見逃せない。同じ別居志向のなかでも「親が老年になっても別居のままで親の生活が望ましく行われる手だてをこうじたほうがよい」とする、いわゆる、手だてを子供からの距離を置いた生活のあり方を強調する方向で望んでいる層が、特に「長男以外を媒介とする」層に多くみられる。また、現在「同居」層は、今後の方向として「同居志向」に、あるいは「別居」層は「別居志向」に 60% 前後傾く状況にある。

③ 今後の嫁姑の位置づけについての考え方として「嫁である」層の 70% が、「改変型」に賛成しているのに対して、「姑である」層では、「維持・重視型」と「温存型」を合わせたものと、「改変型」との割合がほぼ同じである。年代的にみると、一応どの年代においても「改変型」が半数を越えている。

④ 自由記述回答にみられる状況として、嫁姑関係と言えば、同居か別居かという考えがすぐ思い浮かぶ人が約 30% 弱おり、今日までの嫁姑関係としての延長線上にある問題として無視できないと同時に、70% の回答者が嫁姑関係について、直接嫁姑のあるべき（理想とする）関係を、あるいは、自己の現状を忌憚なく述べているという実態のあることに注目の必要がある。その回答内容を A から F の 6 つのカテゴリーに整理してみると、最多回答である「気持ちの切り替え重視型」では、クールな方向というよりはむしろ、情緒的色彩の濃い伝統的な状況域を出ていないものが多い。

以上の調査知見から 2 つの考察を試み、更に、今後残された課題について指摘する。第一に、親との居住形態および居住様式と嫁姑関係についてであるが、同居の場合、別居の場合より確かに「接触する」頻度は、居住形態による物理的距離の近さによって感ずる一種のプレッシャーのようなものを意識する度合いが強まると思われる。しかし、別居することが、嫁姑関係について根本的解決にならないことは、「意識する」と答えた人が同居層 (67.8%) に比べ別居層 (46.6%) の方が少ないが、別居にもかかわらず 4 割以上もの人が何らかの形で「いやだ」という感情と強く結びついているところの「意識する」と答えたことで明らかである。緒言で述べたように嫁姑関係は別居ないしは生活の分離が親子間の葛藤を防ぐ効果的方法であるという考え方は、従来から言われている。しかし今、筆者が問題にしているのはそれだけではなく、最終の回答にはならないのではという点である。

つまり、「人間関係である以上、それから逃げたところからは決して幸せは生まれない」というのが、筆者の

嫁姑関係位置認知について両者の差異

持論である。現実問題として、嫁姑関係が親との同居・別居を決定する最大の要因となるというより、同居・別居の要因は他にも考えられる。例えば、老親の介護について取り上げても、「今後更に高齢化現象が進むなかで中高年女性の雇用化と地域社会の市民参加が著しく進展するものと思われ、出生率の低下と共に家庭における老親の介護を同居の嫁や娘に期待することは困難になってくる」という那須(1982)⁴⁾の意見があるが、「中高年女性の雇用化と地域社会の市民参加が著しく進展する」という点については疑問の余地がある。また、嫁の方が老人に対して距離を置いて接しられるので、よりの確な判断が下せるという専門家の意見もあり¹³⁾、世論も、老後は嫁に介護してほしいという意見が最も多いことについては、先にも述べた通りである。このことは、一つの重要な同居要因として挙げられる。また、老親の扶養あるいは介護ということは別にしても親子同居を決定する条件として、例えば、「敷地の広さ」や「居住地区」や「子供との関係」¹⁴⁾¹⁵⁾、あるいはまた、別居子の持家率¹⁶⁾とも関連してくる。今後の我国の住宅事情が老親子の同居・別居に大いに影響してくると思われる。しかし、「生活の分離」については都市とは異なり、農村ではいわゆる修正直系家族でも「共に食べること」が完全な別居に対する一つの抵抗線をなしているということもある¹⁷⁾¹⁸⁾。都市と農村との差もさることながら、日本の場合、このような完全に同居ではなく、あるいは別居でもない、中間的居住様式がこの先増加するならば、嫁姑関係にどのような影響をもたらすのであろうか。また、58年度の「国民生活白書」で、三世同居世帯と核家族世帯とを比較した場合、前者では家計の勤め先収入全体に占める妻の収入割合が後者の家計よりも傾向的に高く、これは、後者で家事その他の制約が大きいものに対して、前者では家事・育児の分担の可能性の高いことなど相対的に主婦が家庭外に進出しやすいためではないかとされる¹⁹⁾。これについては、今回の調査結果からも推測されるところ、嫁の満足が手段的要因と結びついていることと関係が深いと考えるのであるが、今後、女性の社会進出が著しくなるであろうことが予測される将来、嫁姑で役割分担が可能となる理由からむしろ、嫁側から同居を志向するという一つの手段的な意味の同居も可能性としてはある。しかし、以前と異なり、将来姑が職業を持ち、退職してもなお何らかの社会的な仕事の一端を担っているという可能性も出てくると思われる。更に、質的な課題解決は持ち越されることになる。第二に、人間関係としての嫁姑についてであるが、日常感覚として嫁と姑が

「接触する」可能性の高さが意識の度合いを決定し、しかも、その内容が「嫁である」層は「いやだ」という意識に、「姑である」層は「よかった」というそれに結びつく傾向が強いという状況について、前出の佐野論文(1989)で、全体的に姑より嫁のほうがギャップを大きく感じているという知見と相通じるものがある²⁰⁾。また、最近の傾向として、嫁の姑に対する優位性の問題がある。今回の結果でも年をとるにつれて嫁に同化していこうとする姿勢が強くなるという状況がみられたこともその一つと言えよう。今後の嫁姑関係について、その志向するところ、年代による差も大きいことがわかるが、その差が常にどの時代にも、年齢ごとに同じようなパターンとして現れてくるものか、それとも、現在の、例えば20代の嫁が50代、60代、70代となった時には、現在のそれらの年代とは異なる意識を持つようになるのかについての回答は、今回の研究では得られていない。嫁姑の質的内容という課題は、今後興味深い課題として残されたことになる。例えば何らかの新しい方向を見いだそうとする姿勢も自由記述の言語表現のなかに散見された。しかし、それが単に意識のなかだけの理想形として、あるいは言語表現上の問題のみに終わるのかどうかの見極めについては、今後なお探求を必要とするし、少なくとも現実実践としての変容に向かって煮詰めていく必要があらう。

終わりに、本研究を進めるにあたりご協力ご指導を下さいました福岡教育大学名誉教授平田昌先生に感謝申し上げます。

なお、本研究は、日本家政学会九州支部第37回大会(第一報)、日本家政学会43回大会(第二報)、および日本家政学会九州支部第38回大会(第三報)に於いて発表した。

引用文献

- 1) 内閣総理大臣官房老人対策室：老人の生活と意識，東京，28～29（1982）
- 2) 牛島義友：家族関係の心理，金子書房，東京，351～353（1955）
- 3) 上子武次，増田光吉：三世代家族，垣内出版，東京，282～283（1976）
- 4) 那須宗一：老年社会科学，4，15～22（1982）
- 5) 光川晴之：三世同居，垣内出版，東京，103（1976）
- 6) 菅谷よし子：社老学，15，38～51（1982）
- 7) 長谷川紀子：老年社会科学，6（2），91～105（1984）
- 8) 佐野志津子：老年社会科学，10，42～59（1988）
- 9) 野村哲也：三世代家族，垣内出版，東京，97（1976）

日本家政学会誌 Vol. 44 No. 9 (1993)

- 10) 袖井孝子：テキストブック社会学 (2) 家族，有斐閣ブックス，東京，156～157 (1977)
- 11) 湯沢雅彦：新しい家族学，光生館，東京，83 (1987)
- 12) 総理府：日本人の家庭観，東京，8～9 (1987)
- 13) 袖井孝子：家族・第三の転換期，亜紀書房，東京，225 (1985)
- 14) 高橋正人：老年社会科学，25，82～95 (1987)
- 15) 高橋正人：社老学，25，19～29 (1987)
- 16) 経済企画庁：昭和 58 年度国民生活白書，226(1983)
- 17) 菅谷よし子：社老学，15，50～51 (1982)
- 18) 根发美代子：大分大学人文社会科学紀要，6 (6)，15～22 (1984)
- 19) 経済企画庁：昭和 58 年度国民生活白書，225(1983)
- 20) 佐野志津子：老年社会科学，10，42～59 (1988)